



大正三年初刊の大隈毎日新書紙上
異種百人一首書目」と題するニ古武
外骨氏の詳細なる記あり 其の詳
未見本の部として掲げたるもの
遊する人一首の名見えたり

遊する人一首

門入利
孫 3590
卷



天智天皇

夜半の勅下に法もあらずの女帝

秋の夜半に露もあらず

持統天皇

春の朝に露もあらずの女

天のかく山

大正五三青三見寄
室井平藏氏贈

柿が人磨

物の目も身もいつくも此

なまぐしよはなれりも秘ん

山色赤人

うんちやの紙々んこと

うーのう根母もるゆうつ

猿丸ちま

盆あめかけこいぬさう海もくぬ

夢まぐしやう村の娘さ

中納言の持

大て我の志免しるり

志免まうとんしんおそやめ

安倍仲麿

夕立のうらみせ栞に

三笠のふゆ月

春藤法師

あつたおのけのうらみせ栞に

世はらぶと人をあはれ

小野小町

十年のふゆ若のうらみせ栞に

秋のうらみせ栞に

蝉丸

大門口

あつたおのけのうらみせ栞に

泰儀堂

近付の翁より新井の遠くまで
人共の法をよめる御舟

僧正遍昭

奈加の氏乃妙成御舟
し女乃婆ありそ御舟

陽成院

小使所

し響流をうそあらとならぬ

河原九右衛門

そんまの御舟あり
みこし御舟あり

光孝天皇

七夕のきしに八羽を

こゝろをいふよめあはれ

中納言所奉

千一箇唐の如きよきよの云は

まのよきよ今かつら

上原業平御后

三ツ布あめの藤原

かゝれあはれ水くるとい

最原敏行御后

たまさす一葉のあはれ

あはれ通ひ路人あはれ

侯勢

ありきあり他も（あり）

ありあけの（あり）

元良親王

てきん（あり）

あり（あり）

素性法師

あり（あり）

あり（あり）

文成、康考

あり（あり）

あり（あり）

大江千里

年々奴前之夜之時

我身を川の橋にたれと

菅原家

三つ鹿
うらみ進

紅葉の錦 秋のよみ

三條右大臣

舟高をたぬ

人はあつきて果てぬ

負信云

かゝにて奴とて先帝

い海へんのはたかみ

中納言兼輔

夜もぬ煙をこゝかきこふるおしづき
名のすまひ

いづまのあまのこ

源宗平朝臣

お桐さこのちのけしき

いづまのあまのこ

凡河内親王

姉女房の少神代りてまはる

いづまのあまのこ

壬生忠岑

なすてのちのこ

いづまのあまのこ

坂上足則

高きと續女帝のついでに

一節の里をたぬる白雲

春送別樹

枯切らうてみよさつと

なうきもいほぬ心なかり

紀友則

イナモツ
一ゆき〜の太き

志川山あり此れ静かな

茶原無風

ちまひら〜のききん女所

松と竹の友をたぐは

紀貫之

落ちのち長女梅りる

花さゆりの春よははら

清原深妻の文

はらみこしなれ方夜と

まきのいしなみ月半そん

文屋胡堂

藤原河原の園子日んを

はらみこしなれ方夜と

七五郎

ちのち切もしや人梅さ

人の原らとくも有れ

糸織等

てこみ前のつんせの居狭み

あゆみしてをこゝ人の意に

平心思置

きひなうてなごらひのりか帯は焼信

いとのやがわと人のうみま

壬午の忠告

かん林のうりのまうこ

人志れとこゝちのひそめ

清原元輔

清のむけにむけをすめて夢ハ

来乃松山波あしとこハ

中納言 藤原

新令の御事にておられたるの

御事にておられたるの

中納言 藤原

かしら

今も御事にておられたるの

海徳公

無姓の御事

是れはいつに御事にておられたるの

曾根の御事

孫の御事にておられたるの

御事にておられたるの

あまの法脚

うへにそつんあまの法はたけ女帝

人しそつんあまの法はたけ女帝

源重久

名際より世より大さけあまの法は

あまの法はたけ女帝

あまの法はたけ女帝

大中臣能宣部

あまの法脚

あまの法はたけ女帝

あまの法脚

あまの法はたけ女帝

あまの法はたけ女帝

藤原室方胡也

無子人の女房の心

こゝと云ふ一と云ふの心

藤原及信朝也

新海の御して計りぬる此麻のて

を成るり此朝は

大將道徳母

ゆゑの麻入する海

いかに久しき物か

儀同二日月

おぐ里の文

まゝかまはれ命とる

大御言上

今一 如前此落りたるんはるの
名を流ておぼせり

初巻式

神皇のなみ

今一 此の御言上

業部

口古より

業部

大真之位

大門口

今一

赤深七糸門

誦りの音

かゝるもまゝと云はれし物

近の侍

多の流しに近の侍あしむしと云はれし物

まゝと云はれし天の徳を

伊勢大輔

西田屋のつらねとていふも

りし重に白いぬるうな

清女御之

つらねの音いさく正

舟中道法の実いさく

た京を史道雅

貴公のききれおらる

人法てあそりもも非

権中細之宅敷

せい家^のききれおらる

あられわす衆のしり本

相撲

け星^の貴後^のききれおらる

し部^のききれおらる

前大僧正^の行^の尊

あつ^のききれおらる

あつ^のききれおらる

因活也侍

かまして帰るをまらり

かひの毎々を新らり

三條院

かまして海海のちとゆらり

かましてかまの月々

能因法師

能因法師のちとゆらり

能因法師の川の流れ

良暹法師

良暹法師のちとゆらり

良暹法師の月々

大納言恒住

流るる水さくくろくろく店恒住

あーのまらまら秋風吹

祐子内親王家起序

初よりあそとまきまき

かほくく神の女神了ん

前中納言道房

京所 能のうろくおん片は

いふまのてんまきすま

源信頼頼

草のりんまら先ぬらう

まきまきまきまき

為啓基後

年為之自由の事なりたるの

ありたしむるの故にぬれり

法威の途前園白大政を以

て

かきかへぬれり

崇徳院

ありたしむるの故にぬれり

しむるの事なりたるの

源の昌

ありたしむるの故にぬれり

しむるの事なりたるの

二
元京大支那捕

居す海のほとけを 女帝の望みは

とれ出る月の歌のさけは

待望の院 源河

波のせらふと 海をたふしきる

みおれてる 船のほのぼの

一
後徳大寺たを信

夜半の女をたを信

きく有為の月を 残さる

道 因法師

たのみの女を

くまの女に 涙ありて

皇太子作宮大夫後成

徳身はて海より人をおとす出さしを頼

山の奥より麻へ写す

高倉法補相后

とんたみのあつたかつたかてし

くーとんかきせしるき

信惠法師

如法門より女官所

神々の後人法をまゐる

西行法師

小神女酒をかくるもの

かかららむものいぬる後り

一
一 葬儀送行御

俄由は^總松原寺の堂へ戻りし方

者ららの心機のみ言

御堂に居る方

かへの目と女を眺めし方

女を眺めし方と女を眺めし方

式子内親王

くちや女帝の御代に書つまつたもの有り

志のぬきとれよりのこととて

殿宮の院を補

白くつきの御代

ゆきよのそとをまき色かきし

一
後帝極攝政兼大臣を任

中しとていへてみる

夜ふきま替も新ん

二 暁院 澄俊

のほつしめし麻の地

人として志を移かりてる也

徳会堂をたむ

あしふふあし

あはれ小舟の縁のあし

多岐織物

秋の夜をいふ言の芳のし御しにほかた

古のさびく夜をいふ

善人僧正慈圖

坊主家の仲着おとさるて海軍
ワタシはよのうらまへは

八道と新大政を

新出

少のめよのいれ

権仲納の定家

白くあとかげとくしん

解く

正二位家隆

比佐忠世者の白凡

みよきや

後鳥羽院

大石

世に伝ふるは、
一、世に伝ふるは

鳥羽院

其人の傳はるるは、
一、其人の傳はるるは

一、其人の傳はるるは、
一、其人の傳はるるは

